

テーマ：バッハのあこがれたフランスの舞曲

～ピアノで弾くすてきなバロックをめざして～



講 師：大塚 直哉

東京藝術大学チェンバロ専攻、アムステルダム音楽院チェンバロ科およびオルガン科修了。「アンサンブル コルディエ」「バッハ・コレギウム・ジャパン」などのアンサンブルにおける通奏低音奏者として、また、チェンバロ、オルガン、クラヴィコードのソリストとして活躍するほか、これらの楽器に初めて触れる人のためのワークショップを各地で行っている。チェンバロのソロCD「トッカーレ」(ALM RECORDS)ほか、録音多数。現在、東京藝術大学音楽学部教授、国立音楽大学非常勤講師。宮崎県立芸術劇場、彩の国さいたま芸術劇場のオルガン事業アドバイザー、NHK-FMの朝の番組「古楽の楽しみ」案内役。



ピアノ：岡 珠世

武蔵野音楽大学・同大学院修了。ピアノをゲオルク・ヴァン・デル・ヴェーレン、ヴィレム・ブロンズ、チェンバロを渡邊順生の各氏に師事。2010～2011年、武蔵野音楽学園在外研究員としてオランダアムステル音楽院にて研鑽を積む。J.S.Bachのクラヴィーア作品におけるチェンバロの語法とピアノへの応用について研究し、執筆や講座を行う。現在、武蔵野音楽大学非常勤講師。日本ピアノ教育連盟、日本チェンバロ協会会員。

要 旨

バッハがフランスかぶれであった、というと意外に思われる方もいらっしゃるでしょうか。フランスに足を運ぶことはなかったようですが、しかしフランス人音楽家との交流や楽譜を通してフランスの音楽を学ぶことにとっても熱心であったようです。バッハの採用している装飾音のほとんどがフランス様式であることもそのひとつですし、また、10代の終わり、つまり今で言う高校生くらいのときに、フランス人のダンス教師の下でフランスの舞踏音楽に触れる機会があった、というエピソードも知られています。ピアノでもよく弾かれるバッハの組曲の中には、そんなフランス音楽のエッセンスがたくさん入っているようです。その一方で、バッハの場合、もともとのフランスの舞曲の定番からわざと外れているときもあり、それがバッハの舞曲を魅力的にしている、という面もあります。もとのフランス様式に親しむとそういった面も見えてくるかもしれません。

ピアノで弾くバッハの目指すところは、バロックダンスの伴奏音楽を提供することでも、チェンバロのもののマネをすることでもないと思いますが、しかし、それでもバッハの残した楽譜から、少しでも高い精度でバッハの思い描いた音世界をキャッチすることは、楽器の違いを超えて共通の出発点となるのではないのでしょうか。そのために、当日はピアノとチェンバロをステージにおいて、子供向けの楽譜集『プリュ・バロック』(学研)をテキストに、バッハが影響を受けたと思われる当時のフランス様式の装飾や宮廷舞踏の基本を簡単におさらいしようと思います。その際に、これまでたくさんのお弟子さんを育ててこられたピアニストの岡 珠世先生に加わっていただき、ピアノのレッスンでバッハの舞曲を取り上げる際に問題となることをいろいろ意見交換しながら進めていこうと思います。当日会場でお会いできるのを楽しみにしております。